



Salamander
in
the circle

第十八章 王女の冒険

峯村 明

Salamander in the circle

登場人物

| 第十八章の登場人物 | | |
|-----------|----|----------------------|
| レル・ヴァリス | …… | エウメロス王国・王室付き近衛隊長 |
| ヘルガ | …… | エウメロス王国・王女 |
| カール | …… | エウメロス王国・王子 ヘルガの弟 |
| コタエ | …… | 世界の果ての島の王に仕える女官 |
| スクナ | …… | 世界の果ての島の王に仕える者 コタエの兄 |
| ホペオクー | …… | ケストル人の美女 |

| これまでの主な登場人物 | | | | |
|---------------------------------|----------------------------|-------|-------------------|---------|
| ネ ウ ト ラ 評 議 会 | ダーヴェ | …… | 学術調査団の団長 | |
| | ヒューダー | …… | 学術調査団の団員 | |
| | ヤスウ | …… | 学術調査団の団員 | |
| | ハイヤーン | …… | 本部科学者のリーダー | |
| | ティコ | …… | 科学者 | |
| | ナシル | …… | 本部・事務職員 | |
| | ケ ス ト ル 王 国 | バウル | …… | 国王 |
| | | ウルリク | …… | 第三王子 |
| | | ヘンリク | …… | ウルリクの息子 |
| | | ソルド | …… | 警備隊長 |
| メ ッ サ ナ 市 | バンテオラ | …… | メッサナ市の総督 | |
| | コモラ | …… | メッサナ総督の顧問 | |
| | バラム&バランケ | …… | 双子のジャガー。バンテオラの部下 | |
| | メルノ | …… | 音楽家 | |
| 世 界 の 果 て の 島 | ホシナ | …… | ホシナ族の族長。マミヤの父 | |
| | オマキ | …… | ホシナの妻 | |
| | マミヤ | …… | ホシナとオマキの娘 | |
| | ゴン・キト・コマ | …… | ホシナ族の男たち | |
| | サノヒコ | …… | 王に仕える役人 | |
| | アマセオ | …… | 王の兵士 シトリ族の者 | |
| | カガセオ | …… | アマセオの弟 | |
| | ヤサカオ | …… | アマセオの旧友 | |
| | チドリ | …… | アマセオの妻 | |
| | ハマツ | …… | チドリの父 | |
| 黄 金 門 市 | タマシギ | …… | ハマツの息子 | |
| | オモイカネ | …… | 王に仕える者 日読み | |
| | フツヌシ | …… | 王に仕える者 将軍 | |
| | ミツハ | …… | メッサナからの亡命後のメルノの偽名 | |
| 皇帝 | …… | 皇帝 | | |
| ハイスロイ | …… | 皇帝の息子 | | |

目次

[登場人物](#)

[王女の冒険](#)

[284.](#)

[285.](#)

[286.](#)

[287.](#)

[288.](#)

[289.](#)

[290.](#)

[291.](#)

[292.](#)

[293.](#)

[294.](#)

[295.](#)

[296.](#)

[297.](#)

[298.](#)

[299.](#)

[300.](#)

[back number](#)

[第十八章のあとがき](#)

[奥付](#)

王女の冒険

284.

拡張中の地下シェルターから外へでてみると、王都からだいぶ南へくだった場所だとわかった。遠く、都市の残骸がうっすらと見える方角に黒煙が上がっているのが見えた。巨人族が何かを燃やしているのだろう。

スクナは、近くで見ますかと尋ねたが、ヘルガは首を振った。両手で押さえたマントに顎を埋め、スクナの肩越しに黒煙を眺めた。

「何が起きているのでしょうか。世界はどうなってしまうのかしら」

「——思うに……」スクナは重く口を開いた。「人間は、世界は、弄ばれていますな」

「だれが？ なぜ？」ヘルガの声は重かった。

「さあ。……ケストル王国はこの方角ですな。一度行ったことのある場所、あるいは誘導してくれる者がいる場所は瞬間移動できますが、それ以外は目視で探すしかありません。現地までこのまま飛行しますぞ」

お任せします、とつぶやき、ヘルガはくちびるを噛んでいた。

(うかつだった)

ケストルにはバイスロイのほかにエウメロスの者も残っている。そのひとはレルの副官だ。レルをはじめ、今までだれもそのことに触れなかったのはなぜだろう。彼らはケストルとの交渉のために残ったというが、果たして、交渉が成立する、つまり巨人族を撤退させるという勝算があったものか。巨人族の増軍についてレルは、「彼らは自分の判断で行動しているのではないか、もはやケストルの下にいないのでは」、と言っていた。レルの説が正しいなら、ケストルとの交渉など無駄だということだ。ヘルガが開放される時点までは可能だったかもしれないが。

(バイスロイたち残留組は、単に時間稼ぎをしていただけかもしれない。私を逃がすために?)

そのヘルガは今、残留組救出に向かっていた。

(けれど、以前と条件はまるで違うわ)

生き残った彼女の国民は全員、巨人族が追って来られぬ地下へ移動し、ケストルと繋がっていた摂政は自分から出て行き、弟は成長し、黄金門の人々は皇帝はじめ、信用できるはずである。エウメロスと利害が一致しているゆえに。

スクナが言うように、世界は弄ばれ、試されているのかもしれない、とヘルガは思う。そして、上等だわ、と独り言ちる。彼女の語彙にはなかったが、コタエとつきあううちに覚えた言い方である。

誰が弄び、試しているのかしれないけど、もう、だれも死なせはしない。私の命に代えても——！

285.

とつぜん、スクナが立ち止まった。いや、飛行を止めて空中に佇んだ。彼が遠くを見ているのに気づき、ヘルガはその視線の先を追う。なにかが宙を近づいてくる。

「なんだ」、とスクナは言った。「おぬしか。こんなところで何をしているのだ」

「ご挨拶ですね」、と近づいてきた者は答えた。「貴公こそ何を？、人さらいですか？」

「人聞きの悪いことを言うでない。このお方をどなたと心得る。畏れ多くもエウメロス王国の王女、ヘルガ殿下であらせられるぞ」

相手は、「へへー」と平伏しなかった。ヘルガと目が合うと、口をつぐみ、「おお」とうめいた。「これは——高貴な姫君とお見受けする」

「だから～。エウメロス王国の王女さまだとゆつとる。ひとの話を聞いとらんな」

＊

「これなるは拙者の一族に連なる者、名をアマセオと申す。あやしい者ではござらぬ」

時代劇のようなセリフでスクナに紹介されて、ヘルガはアマセオに目礼し、アマセオは「アマノカガセオと申します」と自己紹介した。スクナより一回りも二回りも若い風体である。

「で、こんなところで何をしているのだ？ なにかあったのか？」

「それなんですが」、とアマセオは説明を始めた。ホシナ族を載せた舟はいったんは大陸に上陸したが、今、はるか西の沖にある島に着陸しているという。

「ほう？ また、なんで？」

「聞かないでください。もう、風まかせならぬ船まかせなんですから。故郷を失って何千里、見知らぬ土地を放浪してきて、みな疲れ切っていたのはご存知でしょう？ ここでひと休みせよということじゃないかって、みな、ほっとしてますよ。とてもよい島です。気候はおだやか、青い空、遠浅の海、これがまたすばらしくきれいで。少し奥に入

れば温泉まである。火山島なのです」

「ふうん、温泉か！ それはいいな！」

「ええ。ですが、いくらなんでも平和すぎて終着点とは思えないって、みんな言ってます。ただ、しばらく、逗留になりそうな雰囲気です」

スクナは、そうかー、とうなずいてから、こっちはかくかくしかじかなのだ、と説明した。

*

「そんなわけでおれは大任を仰せつかってな、ケストル王国へ向かう途中なのだ」

アマセオの顔つきが微妙に変わってきているのにスクナは気がついた。ヘルガには申し訳ないが、興味をそそられ、生き生きしてきた感じなのだ。アマセオもまた生活が激変したわけで、緊張や疲れがたまっているにちがいがなかった。それこそヘルガには申し訳ないが、こいつにも気分転換が必要かもしれないと、そんなことをスクナが考えていると、アマセオは、「王女殿下」、とヘルガに直談判を始めたではないか。

「同道をお許し願えませんか。なにかのお役に立てるやもしれません」

(近頃の若いもんはちゃっかりしておるわ)

286.

バイスロイはもてた。広い額に黒髪がかかり、精力的な風貌に底なし沼のような緑色

の瞳は神秘的というより、妖しげでさえある。体つきはがっちりとした逞しいが、これは趣味で鍛え上げたもので、実践的な目的があったわけではなかった。見栄えがよく、服装も身のこなしも洗練され、甘いバリトンで会話もスマートにこなす男がもてないわけがなかった。

ケストル王宮を横切る時には彼を崇拜する女性たちがぞろぞろと列をなしてつき従った。これは宮廷の男たちには面白い光景ではなかった。バイスロイ崇拝者のなかには、彼らの姉妹、友人、はては婚約者も混じっていたからである。

ここではバイスロイの正体は伏せられていた。他国からの旅行者で、ケストル国王の友人の子息とかいうことになっていた。どこからともなく、高貴な家柄の出であるという噂も流れてきたがわざわざ正否を確かめようという者はなく、崇拜者たちはむしろ噂をもとにより刺激的な妄想を膨らませるのだった。

バイスロイはもて、反感を買い、いいように噂の種にされ、うんざりしていた。

「こんなことをしたくて、遠路はるばるやってきたんではない！！」

誰もいない部屋で鏡に向かってそう怒鳴った。不機嫌な顔もなかなかのものだな、と前髪をかきあげながら。

彼は最初から、巨人族について話し合いたいとはっきりと申し入れていた。しかし、国王は本当に、まったく、てんでなんにも知らなかったし、画策した張本人ウルリク王子は計画が思い通りにいっていないのに気づいて、ひたすら知らぬ存ぜぬと繰り返していたから、バイスロイには話しあう相手がいなかった。

ケストル当局には妄言を言っているように受け取られ、しかし実は本当に高貴な身であるために放っておかれず、どうにかして王族貴族の年ごろの娘を彼に縁付けようという思惑も湧いて出た。彼にはエウメロス王女という婚約者がいるそうだが、その女は“不慮の事故に遭っていなくなる”ことになっていたから、なんの問題もなく、彼は接待潰けに遭っていたのだった。

観劇、演奏会、舞踏会、宴会、お茶会、狩り、etc

そんなわけだったから、バイスロイに随行している者たちは全員、接待のおこぼれにあずかる羽目になったのだが、彼らはけっしてあずかりたかったのではない。ただ、転がり込んできた黄金門の皇帝家の血をぜったいに逃すまいというケストルの強烈な執念に、抗うにはエウメロス人は純真にすぎ、圧倒されてしまったのだった。

287.

バイスロイは、帰国しようと思えばそうすることもできた。

が、なんの成果も挙げられずにおめおめと帰れるものか、その気持ちが彼を引き留めていた。ケストルがなんと言おうと、巨人族が彼らと繋がっているのは見え見えだったのだから。そうだと、彼は気がついた。（どこかにその証拠があるはずだ！）

自分の参謀は言うに及ばず、エウメロス人のふたり…政府高官のロウナスと王室近衛隊長副官のアンテロ……にもその考えを伝えた。接待の場に目を光らせ、その人脈をフルに使って、証拠を見つけるのだ、と。そしてやがてわかってきたのは、王都に怪しいものはなさそうだ、ということだった。

（王都ではない、とすれば……）

王宮内にあてがわれた客室のバルコニーで彼は物思いに沈む。城の一画でかなり上の階にあるが、花は咲き乱れ、ミツバチが飛び、小さな噴水が涼しげな水音をたてていた。そこに、衣擦れの音。

「むずかしいお顔……」

女の声に顔をあげたとき、彼の表情には憂いの陰が少し残っていた。

「どんなむずかしいことを考えておいででしたの？」

「ホペオクー」と、彼は女の名を口に、「そなたが会いに来てくれないから、もう嫌われたのだと思ってね」甘い声で、悲しげに、ぬけぬけと云ってのけた。この声とセリフに籠絡されたのは彼女で五人目である。そして彼の緑のまなざしは声以上に雄弁だった。

ホペオクーは、ひとりがけのソファに深く沈み込んでいるバイスロイの前に立ち、身をかがめ、人差し指でちゃんと彼の鼻をついて言った。「たいくつなのね、女たらしさん」広く開いたデコルテから豊かな胸がのぞき、豊かな黒い巻き毛がかかっている。バイスロイはこの手の服が嫌いだった。その節操の無さが彼の美意識に合わないのだ。それはともかく。

「退屈なんてしてないよ。ここは美しい。自然も、人も、むろん、そなたも。あんまり美しくて、かえって悲しくなるんだ……ぼくはどうしてしまったんだろう」

「バイスロイ、気の毒なかつた。あのね、悲しいお知らせがあるの。しばらくここを離れます」

「え……そなたが？ ぼくを置いてどこへ行ってしまふんだい？」

「あなたを置いてつたりしませんわ。いっしょよ、いっしょに行くの、離宮へ。ここよりももっと美しいところ。あなた、悲しくて死んでしまうかもしれなくてよ」

ホペオクーはふっくら、というより、肉感的なくちびるで微笑した。

288.

離宮へ招待されたのはバイスロイだけで、参謀パソネルとエウメロス人のふたりは対象外だった。特別な場所なので、王族以外は遠慮願いたいというのだった。美女ホペオクーがバイスロイとその他の者たちとの分断を図ったとはつゆ知らない。残る者たちは言った。「別行動の方がむしろ好都合かもしれません。我々はなお、王都の調査を続け

ます」

じつはもうひとり、エウメロス人がいた。航空機のパイロットである。交代要員がいなかったので、パイロットは始終、機の近くで寝泊まりしていた。時には接待されることもあったが、彼は極力断わっていた。ケストル人には不思議がられたが、エウメロス空軍の貴重な一機を預かる彼にとっては、ごく当たり前のことだった。

そのとき、虫が知らせたのか。珍しくバイスロイはエウメロス人パイロットの肩を叩き、「何かあったら迷わず飛んでくれ」と言った。

離宮行の一行が旅だった、まさにその日。堂々と空から王宮を訪問した者がいて、王宮は騒然となった。それがエウメロスからの使者だと聞いて、ロウナスとアンテロは血相を変えて走った。

いったい誰が！？

血相を変えて走ったのはエウメロス人だけではない。城の主、その人もだ。

まさか！！ 生きていたのか！！？

王宮の大広間。天窓からから入る真昼の太陽光の中に立つそのひとは、まさに黄金色に輝いていた。

広間に駆け込んだ彼らは、同時に叫んでいた。「ヘルガ王女！！」

289.

「お久しぶりです。パウル陛下」自分の暗殺を謀った相手にヘルガはしっかりと目を当てて言った。この卑劣な王は彼女を鳥に変えて閉じこめ、エウメロスへ帰す段になって強烈な魔法をかけて精神の自由をも奪ったのである。思い返すと煮えくり返る思いだが、ヘルガは、出立前のコタエとの会話を思い返した。

(王女さまはケストルを発つときのことを覚えておいでにならないでしょう。それもそのはず、魔法をかけられ、正気を失っておられたのです。それはとても強力なもので、私には解くすべがありませんでした。ケストルの航空機から執拗に爆撃され、これまでかというときに至った時、王女さまはずっと握っておられたマミヤの手をお放しになった。そう、気がつかれたのです。なにがあったか、想像できますか、魔法を解いたのは私ではありません)

ヘルガは正直に言った。わからない。なにがあったのですか？ と。

コタエは微笑み、頭を振った。(私はそのときほど、ひとの思いの強さというものを知ったことはありません)

ヘルガは国境を越えてエウメロス領に入ったときのことを思い出した。あの時のメンバーの中に、コタエが解けないほど強力な魔法を解いた者がいる？ ——だれ？

(意外な人です。でも決して意外ではありませんよ)

ヘルガは夢見心地で覚えている。航空機から脱出するときも、宙に浮き、地面に投げ出されたときも、だれかがしっかりと守ってくれていた。あれは——夢見心地だったけれど、夢ではなかったのか——

世界を弄び、試す者よ

絶ち、引き裂く者よ

よくみるがいい

私は戦ってみせる！！

私はひとりではないから！！

290.

国王パウルは驚きの声をあげながらヘルガに駆け寄った。彼女の目が正気であることに気づき、再度、至近距離から暗示をかけようとしたのである。前回は簡単にかかったのだ、今度だって——！

ヘルガは、自ら手を取らせようとするように、パウルに向かって手を差し伸べた。パウルは、得たり、の思いでその手を両手でつかんだ。次の瞬間、彼は奇妙な悲鳴をあげてヘルガの織手を振り放した。うっかり毒虫を掴んでしまったような反応だった。ヘルガにはなにか意図があったわけではなかったものでヘルガの方が驚いた。王宮の衛兵の方はもっと驚き、訪問者を取り囲み、王を助けようとした。

「な、なにをした！！」

パウルは大声をあげた。

「なにもしておりませんが」

ヘルガは落ち着いて白い手袋の両手を開いて見せた。その動きでマントが開き、黄金の胸飾りの一部が垣間見えた。パウルが目が大きく見開かれた。それは黄金門の皇帝からの親書に描かれている『皇帝家のしるし』ではないか！ 金と碧玉の取り合わせは独特で、見間違いようがない。すると、この小娘と黄金門の関係は本当だったということか。

わなわたと震えているパウルをよそに、ヘルガの目はエウメロス人のふたりを探し当てた。「ロウナス！ アンテロ！！」「殿下！」「ヘルガさまっ！」

「ふたりとも。ごくろうさまでした。迎えにきましたよ」

パウルを飛び上がらせたのと同じ手でヘルガは彼らをかき抱いた。彼らは感激してパウルと違う理由でわなわたと震えた。

「して。ロウナス、アンテロ、黄金門のおふたりは？」

彼らの背後から男がひとり、進み出た。「エウメロスの王女殿下、私はバイスロイさまの部下でございます。バイスロイさまはここにはおられません」

「おられない？ ではどちらに？」

「それが……招待をお受けになり、けさがた、離宮へ」

とたんに王女の顔つきが硬くなったのでバイスロイの部下はびっくりした。バイスロイはとんでもなく危険な場所へ行ってしまったのでは？

ヘルガは安心させるように彼らにうなずきかけ、パウルに向き直った。

「パウル陛下、事前のお知らせもなく突然の訪問、お詫びいたします。長らく滞在させ

ていただきましたこの者たち、またバイスロイさまに帰国を要請するものでございます。これをもちましてこの者たちは貴国を出国いたします」

「あなたたち、すぐに空港へ。エウメロスの航空機が出発準備をしています」

「殿下は！」

「私のことは気にしないでよろしい。さ、早く」

291.

「ずいぶんと——急なことであるな。なにをそう急いでおられるのか」

パウルは威厳を取り戻そうとしている。しかし他国の王女の手を取ろうとして大声をあげてあたふたとした醜態はもう、臣下のものたちの目にしっかりとやきついてしまった。

「陛下、大事なお話がございます。できれば人払いを」

小娘のいうことなど聞けるか、という表情がパウルの顔に浮かび、ぞんざいな態度で言った。「よい。今ここで聴く。ぞんぶんに話されよ」

ヘルガはじっと相手を見た。腰かける椅子を勧められるでもなく、立ったままである。周囲を衛兵が取り囲み、パウルは横を向いてふんぞり返っていた。

衛兵を押しよけるように進み出た大柄の男がヘルガに近づいた。ケストル人の目には異様な風体の大男は、ヘルガの背後から近づき、彼女に何か言った。ヘルガはうなずき、マントをとり、男は受け取って退き、片膝たてて控えの態勢をとった。

「あまり時間がございません。要点のみ、申し上げます。パウル陛下、即刻、この地から避難されるよう、お勧めします。できるだけ、南、または西へ。できるだけ、早く」

パウルは、きょとん、と周囲を見回し、笑みさえ浮かべて言った。「意味が、わかり申さん」

「北から洪水が近づいています。お逃げください」

ヘルガはぐると体をまわし、周囲を取り囲むものたちに向き直った。胸の飾りが燦然と陽光を弾き、衛兵たちの目を射た。

「お逃げなさい！ 北から洪水が近づいています！ 洪水はあなたがたの土地を洗い流してしまうでしょう。このお城ができる前、この土地がなにもない荒野だった、あの伝説を思いだして！ あなたがたの古い伝説は真実です！ この土地は再び、水と氷によってなにもない荒野に戻ろうとしています！ 逃げてください！！」

「ええい、小娘！！ なんという戯言を！！ そうか、貴様は魔女だ、みなのもの！ この魔女をひっそらえよ！！ 火あぶりにしてくれるわ！！」

控えていた男がずっと、立ち上がった。

「ケストルのみなさん！」ヘルガはなおも声を張った。「私は黄金門の皇帝の言葉を伝えに来ました。パウルさまはそのことをよくご存知です！」

「ヘルガどの！！」スクナは低い声を放った。「もはやこれまで！ 離宮とやらはここより北にある。すぐにバイスロイどのの救出に向かわねば！！」

スクナに抱きかかえられながらヘルガは叫んだ。「逃げてください！！ 逃げて！！」

292.

ヘルガと従者らしい大男は彼らの眼の前からかき消すようにいなくなった。城の真上に瞬間移動したふたりはしばらくそこにとどまって、足下の様子を見ていた。ケストル城では上を下への大混乱が起きていた。

「ヘルガどの、“あの伝説”とは？ まさか思いつきで？」

「いいえ。以前、マミヤが……あなたのおくにのマミヤが、話してくれたのです。彼女も囚われの身であったとき、ケストル人の召使が子守をしながら小さな子に話して聞かせていた、と。ケストルには枯谷のような荒野からりっぱな王国が創られたという伝説があって、だれでも子供のころから聞かされて育つのだとか。それを思い出したんです。衛兵たちは、あっ、と言う顔をしていた。皇帝陛下がおっしゃっていたこともマミヤが聞いたことも、同じだった」

「ホシナ族の娘が——」

「私たちはそれぞれのくにで、遠く離れて生きてきた。けれど、繋がることのできるのですね——」

城から次々と人が飛び出してきて、城下町へと散らばっていく。家族や友人知人、そして見知らぬ人々へ、避難の要請が走っているのだ。パウル王の運命は……わからない。スクナとヘルガは北東へ、離宮へと向かう。

「ロウナスたちは離陸できたでしょうか？」 「この目で見届けました。ご安心を」

パイロットにはある座標が伝えられていた。皇帝から預かったもので、エウメロスから拡張している地下道の到達点だという。地下と空とが出会う地点である。

「それにしても、アマセオを偵察に行かせたのは正解だった」

ケストル北方の広大な氷河の中に小さな人工物が突き刺さって、狼煙のように白煙をあげていた。発見したアマセオは、あとになって言った。

「声が聞こえたのだ。助けてくれと、呼ぶ声が」「“それ”は見る間に氷の裂け目に落ちていき、助けることは、かなわなかった」

293.

「救難信号を捉えただと！？ 本当か！？」

ティコ博士は通信機に飛びついて怒鳴った。行方不明だった無人偵察機が見つかったらしい。ブルー・マーキュリーとやらは無事か！？ ティコの関心はそれだけだった。

「本当です。ただし、ほんの一瞬のことで……」

「……どういうことだ」

「ですから——ほんの一瞬、信号が届きまして……」

「ええええい、場所はどこだ！ どこから来た！？」

「ですから、ほんの一瞬のことで」

「つまり、わからんと？」

「はい、なんにもわかりません」

「ブルー・マーキュリーは」

「わかりません」

かああっと頭に血がのぼったティコ博士は椅子を担ぎ上げ通信装置に投げつけた。虎の子の通信装置は壊れ、外部との連絡はとれなくなった。同時に、完成直前だった原子爆弾は宙に浮いてしまったのだった。

294.

闘技場に歓声が反響している。すり鉢型に造られた観客席は空きがめだつ。客は貴族や商人、芸術方面で名を馳せた著名人など、特権階級ばかり。バイスロイには見知った顔ぶれが多かった。そのバイスロイをできるだけ長く足止めするようパウルから命じられたウルリクが催した、『バイスロイさまを囲む集い』の一環だった。

深い森の中の離宮はいっしゅん息をのむ美しさだったが、バイスロイはすぐに飽きてしまった。どこか……没頭できないものがあるのだった。申し分なく美しいのだが、なにかが違う、と彼は感じてしまう。説明のできないもやもやがまとわりつき、現実引き戻されてしまう。

それは施主のウルリクが『導く者』にそそのかされて、女性の歓心を得るのを目的に創った場所だったからだが、バイスロイが知る由もない。その女性とはほかならぬヘル

ガである。

そしてバイスロイが感じていた違和感のものは、美しい離宮からほど遠からぬ場所にある闘技場だった。なぜこれほどかけ離れたもの同士が隣接しているのか、彼は理解に苦しんだ。出会う人ごとに、その疑問を遠回しに尋ねてみたが、わかったことは、それがケストル人だ、ということだった。彼らは流血を見るのが大好きなのだった。もう、性分としかいいようがなかった。

これにはさすがのバイスロイも辟易した。美女ホペオクーを目の前にしても、美しく着飾りながら、その下で舌なめずりしているイメージが浮かんでしかたがない。彼女自身にそんな思惑はなかったとしても（実はあったが）、抱いてしまった印象というものは恐ろしいと彼は思った。

もちろん、闘技場は我慢できる場所ではなかった。いったいいつの時代のだ、というような武器を手に手に、戦闘が繰り広げられる。観客は日陰でそれを眺めて、手に汗握り、拍手喝さいし、嘆息する。観客は試合を眺めるのと同じくらいの熱量でバイスロイの様子をうかがっている。一応、自分は賓客だという自覚はあったから、顔にも態度にも礼を表し、当たり障りのない感想をのべておいたが、ついに次の試合との合間に中座した。新鮮な空気が必要だった。ホペオクーが追いつがってきたが、次の試合までには戻るからと笑顔で言いふくめ、追い返した。城内案内人も同じ方法で追放し、広大な闘技場内で彼はついに迷子になった。

そして、次の試合は始まらなかった。永久に。

最初に異変に気づいたのは誰だったのか。空気が、地面が振動している。だが、大人数の観客で満杯になった催しのときには必ず起こる現象だったので、さほど重大事とはとらえられなかった。闘技場の一番高いところで周囲を警戒しているはずの兵士らは試合の方に気をとられ、仲間内でやってる賭けの行方に気をとられ、よそ見をしていたから、北方の森林のかなたに普段と違う白っぽい煙がかかっているのに気がつかなかった。

叫んだのは誰だったか。「たいへんだ！！」「逃げろ！！」叫び声は尋常ではなく、近くで聞いた剣闘士たちは思わず手を止めた。観客はとつぜん止まった試合に、怒った。大金が絡んでもいればなおさらである。拳が振り上げられ怒号が飛び交った。あつという間に闘技場は大混乱に陥り、間近に迫る異様な振動に気づいた時は、手遅れだった。

その音を耳にしたとき、アマセオは恐怖のあまり体が凍りついた。大地が呻き、天がうなるような、言い表しがたい、異様な音。分厚い氷の壁が裂けようとする、数千年かけて形成された氷の、断末魔の息の音。彼の眼の前で世界が崩れた。その凄まじい衝撃はアマセオを空高く吹き飛ばし、一瞬、気を失いかけた。誰かが呼んでいる。「助けて——助けて——」ひどく冷静に繰り返す呼び声は次第に遠くなり、白い煙と崩壊の爆音に呑み込まれた。

ぼう然自失しながらアマセオは気を取り直す。異国にたどり着いて初めて出会った美しい女はこの災厄から誰かを助けようとしていた。行く先も目当ても定まらないおれは、その行為に準じようではないか。

アマセオもスクナもケストルの離宮などというものを知らなかったから、目視で探すほかなかった。それも見知らぬ国の見知らぬ地形である。山の連なりと森林のなかに隠すように造られたそれを探し出せたことは、むしろ奇跡だった。

296.

闘技場を逃げ惑う大混乱の中に、「バイスロイさま！ バイスロイさま！！」と呼ばる女の声に、スクナは急降下し、女のそばに降り立った。ヘルガは女の薄い衣装を掴んで混乱に負けじと声を張った。「バイスロイさまはどこですか！」

女はぎょっとヘルガを見、「知らないわ」と、手を払いのけた。それから相手のつま先から頭のでっぺんまでじろじろとねめまわし、「知ってても教えないわよ」口元にくっすらと笑いを浮かべて言った。ヘルガはなにか言おうとしたが、スクナはすぐさまその女に見切りをつけてヘルガの腕を引いた。そして片方の手で衛兵らしい男を掴まえていた。「黄金門のバイスロイ様はどこか知らぬか」

衛兵はいっしゅんためらった。「我々もお探ししているのだ。しかし見当たらない。場内で迷われたか、それとも離宮に帰られたのか。あっ」

「なんだどうした」

「離宮との通路の近くにもうひとつ別の通路がある。まさか、そこを間違われた——」

「どこだそれは！」

「南門の地下——」

「お願い！ そこへ連れて行ってください！」

ヘルガは衛兵を急き立てた。泡をくった衛兵と、会話に聞き耳をたてていた女があわてて後を追う。肝をひしぐ地響きが背後に迫っている。

スクナが宙を飛ばうにも、そこはすでに場内の半地下の廊下で、幅はあったが高さが

なかった。人々が右往左往するなかを彼らは、南門へと走った。スクナは遠感でアマセオを呼んだ。

(アマセオ、おれだ。今どこにいる？ 誘導する！)

(ありがたい！ いや、スクナさん、洪水の速さが半端ではない。カガセオは目いっぱい飛ばしているが、追い越されそうです。ああそうか、地形がどんどん下り坂だ。ちょっとした山なんかものともしない、針葉樹の森なんか、雑草のようになぎ倒されてる——恐ろしい——！)

廊下の途中で別の衛兵たちが「ここから外へ出て！ まだ航空機に乗れる！）叫びながら腕を振り回している。

スクナたちを先導する衛兵が声をかけた。「バイスロイさまは見つかったか？」「わからん。だがバイスロイさまの特別機はまだ待機している」「まさかとは思いますが離宮へ戻られたのでは」「それはない。南門の門番は誰も通っていないと言っている」「なんだって——」

「衛兵さん、別の通路の場所を教えて！ そうしたら私たちだけで行きますから！ あなたは早く退避を！」

衛兵は、えっ、と言葉を呑んだ。あなたは早く退避を。今までかけられたことのない言葉だったのだ。「いや、わかりにくい場所なので。案内する」

「おい貴様！ 極秘通路を部外者に教えるつもりか！？」

「この人たちはバイスロイさまの関係者だ、部外者ではない！ 考えてもみろ。バイスロイさまにもしものことがあったら我々全員の首がとぶ！ だからどんなささいな手がかかりでもあたる必要があるだろう！ 行くぞ、あんたたち、こっちだ！」

あとから息を切らしながら駆けてきた美女は「この先はいけません、ここから外へでてください」と腕をつかまれている。「私をだれだと思ってる！！手を触れるでない、

無礼者！！」気の毒に、美女ホペオクーを引き留めた衛兵は顔に爪をたてられて悲鳴をあげた。

あとをついてくるホペオクーを見てスクナは立ち止まった。彼女は顔をゆがめて叫んだ。「下郎！！そこをおどき！！」

「あいにくおれはあんたの下郎でもなければ、どくわけにもいかんのだ」

ホペオクーはみぞおちに突き出されたスクナの拳のうえに倒れた。「おーい、その誰か。このおなごを頼むわ」

そのとき、（スクナさん）と呼ばれた。アマセオだ。（今、貴公の真上にいる。急げ、洪水がすぐそこまで来ている！）

297.

南門の門番は一応職場についていたが、立ったままこっくりこっくりと居眠りをしていた。

それを見てバイスロイはしみじみと（ケストルだなあ）と妙な感慨を覚える。ケストル兵の規律のいい加減さはもはや伝説的だった。（これでは部外者はやり放題ではないか。外から怪しいものが入ってきても気づかんだろう）

門番をそっと寝かしておき、バイスロイはそれとなく物色を始めた。闘技場はばかばかしいほど大きく、そして構造にどこか腑に落ちない部分があった。それは場内を巡る半地下の廊下の天上の低さだったり、闘技者入場門の異様な大きさだったり、である。どこか腑に落ちない、どこかちぐはぐなのだ。観客席を抜け出したバイスロイはまっすぐにここへやって来た。彼の特異な感受性が、ここには何かある、と感じていたのであ

る。

彼は意識を凝らし、『何か』の正体を探ろうとする。足元——地面の下に、空間？それは南門の向こうから彼の足下を通り、闘技場内部へと向かっていた。それは半地下廊下の下をしばらく並行し、やがて東方向へゆるやかにカーブし……闘技者入場門の、観客がみることのできない側で……地表に繋がって……

(なんだこれは)

(なんなんだこの——巨人が通れそうな大きな空間は——)

(ああ)、と彼は詰めていた息をゆっくり吐いた。

298.

誰かが向こうから走ってくる。石造りの床、壁、天井に、足音が反響する。声が聞こえる。呼んでいる。女の声が、「バイスロイさま」、と。彼は舌打ちし、つぶやいた。わるいね、ホペオクー。ぼくは貴女のような人には釣り合わないよ

門番がはっと目を覚ました。目の前に鋭いナイフが光っている。そして金の指輪とが。バイスロイは言った。秘密の通路の扉を開けよ。報酬は金の指輪だ。門番は二つ返事で応じた。

ヘルガが駆けつけた時、門番は指輪のはまり具合を試しているところだった。いきなり、バイスロイはどこか、と聞かれ、答えに窮した。門番の指には不釣り合いな黄金の塊のごとき指輪が光っていた。その真ん中には碧玉が。

「バイスロイさまは！？」見たことのない女に胸元を掴まれ、門番は正直に薄暗い通路をゆびさして言った。「この先五十メートルで本線と合流します」

「ありがとう」

女のあとからさらに男がふたり走ってきた。門番には目もくれず、女の後姿を追っている。

スクナは走りながら言った。「わかったな、アマセオ」
「いいいいいや、しかしそれはスクナさん！！ いくらなんでもそれは！！」

二人の声に気づいたのか、それとも力尽きたのか、ヘルガは走るのをやめ、膝をついた。かけよってくる二人を見て、ヘルガはマントを外した。「アマセオさま、これを持って行って。お願い、スクナさまの言うとおりにして」

「アマセオ、今コタエに誘導を頼んだ。まっすぐにエウメロスに行きつける。だから先に行け。おれたちはあとから行くから」

スクナはヘルガを抱き上げて地を蹴った。

立ち尽くすアマセオの目の前でスクナとヘルガは通路の奥へ消えて行った。アマセオの背後にはこの世の終わりが迫っていた。

299.

バイスロイが入っていった通路は人が数人並んで通れるかというような狭いものだったが、五十メートルも進むと広い場所に出た。天井はおそろしく高く、幅は相当ある。バイスロイが出てきた通路の右斜め後方へと緩やかに下がって行っているのが見え、前

方に目を転じれば——奥は行き止まりの壁。

(なんだこれは——ただの大広間——?)

壁も天井も微光を発していて、薄暗くはあるが死角はない。危険が潜んでいる心配はなさそうだと、彼は思いきって足を踏み出した。数歩行ったところで、ぶん、と鈍い音が耳に入った。同時に——足元が振動しているような気がした。

(禁断の地に踏み込んでしまったか)

しかし彼はそれで恐れ入るような人間ではなかった。コタエの言い方を借りれば、上等だ、と思った。間違いない、これこそが、あの——

と、そのとき、「バイスロイドのっ」後方から野太い男の声。高貴なバイスロイドはお下品な言葉でこっそり罵った。(誰だ、離宮当主のウルリクか?)

「バイスロイドのっ、お待ちを！！ ——おおっ」

突然、石の構造物全体が激しく揺れた。とたんに天井に亀裂が入り、石の塊が落ちてきた。スクナは危うく身をかわし、床に身を投げ出した。彼は大声で叫んだ。「すまぬ！！ 大丈夫か！？」「私は大丈夫。あなたこそ！」

どうみてもそれはウルリクやホペオクーではなかった。

「しまった！ 通路が塞がれてしまったぞ！ それに、その方ら、何者だ！ ケストルの者ではないのか？」

300.

床から半身を起こした女の方が言った。「バイスロイさまですね！ 私はエウメロスのヘルガ。あなたをお迎えに——スクナさま！？ あなたおケガを！？」

「いや……大事ござらん……」

「そちらのご仁はエウメロス人ではないようだが」

「それがしはただの通りすがり、気になさらんでください。そんなことよりバイスロイどの、ここにいてはいけない。外へ出なければ」

スクナは気丈にそこまでしゃべったが、彼の様子がおかしいことにヘルガは気づいてぼう然となった。外へ出る方法はただひとつ。スクナの瞬間移動だけだ。しかし、その間にも天井は裂けていく。

「この圧迫感はいったい——」

「氷河洪水が起こったのです、バイスロイさま。あなたのお父上はケストル北方でそれが起こると予想され、私はあなたをお迎えにきたのです」

「この感じだと……おそらく闘技場も離宮も押し流され……さて地上はどうなっているやら」

スクナの苦しげな物言いにヘルガは頭を振った。「見当もつきませんわ」

「ヘルガどの、こんなことは言いたくないのだが、時が時。瞬間移動とは空間においてはほぼ制限はない。だが固体が介在するとなると話はちがう」

「危険だというのね」

「は。まさしく。へたをすると、氷のど真ん中で実体化しないと限らんのです」

スクナは言いながらヘルガの額に流れている血の筋を衣の袖でそっと押さえた。「面目ない。ケガをさせてしまった」

バイスロイは黙って聞いていたが、やがて顔をあげて天井を見上げ、それから大広間

のごとき大空間を振り返った。

「すると——このバカでかい空間も氷の重みでつぶれるかもしれないということだな。して、脱出は可能か？」

彼は自分で問い、自分で答えた。空間の中央を指さして。「可能だ」

そこではなにか目に見えないものが渦を巻いていた。この場にいる三名は誰も知らなかったが、それは世界の果ての島からマミヤを連れ去った渦巻だった。

第十八章 『王女の冒険』

第十九章へ続く

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだ。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンはヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買い、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門市の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

第十八章のあとがき

今回は早かった。前回のあとがきを書き終わってから三日か四日で書きあがってしまった。どーしたんだ、夢のよーだ。古代日本編のころはひとつの章に二か月くらいかかってたから。どうも状況や背景の説明がいるときが一番しんどいみたい。

バイスロイにはヴィジュアルのモデルがいまして…ネーサン・チェン氏。フィギュアスケートの。書いているとどうしてもネーサン・チェンがうろうろする。陽性だけど妖しい。いろんな意味で、清廉潔白なレル・ヴァリスの対極にいる感じ。さあこれからなにをやらかしてくれるやら。楽しみです。←なにもかんがえてない

テキストは早かったのに表紙が決まらなかった。あれこれ試行錯誤のあげく、使ったのが『トゥミ』です。表紙金色の円い部分はトゥミの頭部の飾り。トゥミとは金銀銅の合金を細工、宝石も嵌めこまれた豪華なもので、古インカの工芸品ですが、切断具らしいものがついているのですね。もとは手術用具ではないかといえます。メスやハサミを工芸品に？ ペルーのイカの石で有名なカブレラ博士は装飾部分に人体についての情報が暗号化されているといっています。ネット上にいくつか画像がありますが、同じデザインのものひとつもない。多くはペルー国外に持ち出されて個人所有になっていて、詳しく調べるのは困難だということで…はてさて。

黄金門の『皇帝家のしるし』はこんな感じの半円形で純金製なのです。

奥付

Salamander in the circle

第十八章 王女の冒険

2023年6月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#) [イラストac](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
